

## 第6回 JLLP 翻訳コンクール スペイン語部門講評

翻訳家、国際政治学者、帯広畜産大学講師

イサミ・ロメロ

初めて翻訳コンクールの審査委員を務めましたが、私は他の審査委員とは異なり、文学が専門ではありません。ただこれまで日本の文学作品の翻訳は手掛けています。私が翻訳を始めた頃には今回のコンクールのようなものはまだ存在せず、スペイン語に翻訳された日本文学の作品もあまりありませんでした。しかし、時代は大きく変わっています。その意味で、今回のコンクールは応募者の皆さんにとってとても良い機会であったと思います。

それにしても、応募数の多さには大変驚きました。残念ながら応募者の皆さんのすべての翻訳を読むことはできませんでしたが、最終選考に残った翻訳を見る限り、レベルが高いものであったにちがいはありません。無論、皆さんは新人翻訳家ですから「翻訳ミス」はありましたが、今回のコンクールを通じてスペイン語圏における日本文学への関心と共に、日本語の理解力が高いことを窺うことができました。

今回の2つの課題作品はかなり難しかったのではないのでしょうか。鹿島田真希の「波打ち際まで」は複雑な日本語を使用し、登場人物のセリフにはダッシュがありません。さらに鹿島田自身がフランス文学に大きく影響されていることから日本文学以外の要素も含まれており、スペイン語話者には読みにくかったと思います。一方、向田邦子の「お辞儀」では、日本語特有の言い回しを使用していることから、これはこれでスペイン語に訳すのは難しかったでしょう。また、戦後日本のテレビ界の象徴的存在である黒柳徹子さんも登場しています。そこで私は黒柳さんのエピソードをどのように応募者が訳したのかに注目しました。

以上のことを踏まえて、受賞者の方々へのコメントを述べたいと思います。

最優秀賞に選ばれた Eduardo López Herrero さんは、審査委員全員がベストな翻訳と評価しました。私の観点からすると López さんの翻訳はわかりやすく、両方の作品のエッセンスを的確に訳していると思います。いくつかのミスがあるものの、文学作品を初めて手掛ける以上、当然のことでしょう。これは深刻な問題ではなく、将来作品を出版することになれば編集者や校正者にチェックしてもらえらるでしょう。

次に優秀賞に選ばれた佐野由季さんの翻訳は内容的には問題がありませんでしたが、ミスがやや目立ちました。またスペイン語のミスもありましたが、これは佐野さんがスペイン語話者ではないので当然かもしれません。またスペインの「方言」が目につきますが、できれば中立的なものにして欲しいと

思います。これは黒柳さんの箇所で見られると思います。スペインの「方言」だと、黒柳さんが使いそうもない言葉があるのです。

もう一人の優秀賞に選ばれた Monserrat Sabaté Vizcarra さんの翻訳は全体的にわかりやすかったのですが、やはり翻訳ミスが多いという印象を受けました。ですが、それは編集者らの助けを借りれば修正可能です。ただひとつ気になったのが、鹿島田作品を翻訳する時に、Sabaté さんがダッシュを使用していることです。原文にはありません。この作品の文学エッセンスを消しかねないので、気をつけて欲しいです。このような作品では、作者のスタイルをできるだけ詳細に残しておくことが大事でしょう。

最後に、私が読んだ訳文はすべてレベルの高いものであったことを申し添えておきたいと思います。受賞者の皆さんには、心からお祝いを申し上げます。この経験が今後のキャリアに役に立つことを願っています。